



うれしのほ本 温泉編

美肌湯に心なごみ、体を癒やす

みんなが安心して過ごせる嬉野温泉

「日本三天美肌の湯」と称される嬉野温泉。静かに湯につかれば、まるで絹を身にまとっているようなるつるすべ肌に変わる。

湯上がり肌のよさには理由は泉質にある。ナトリウム分を多く含む重曹泉が肌の余分な皮脂を落とし、角質化した肌をしっとりなめらかにするのだ。飲めば胃腸などの機能を活性化させ、湯に浸れば切り傷や冷え症、神経痛を癒やす。

そんな嬉野温泉の歴史は古い。文献に登場するのは713年「肥前国風土記」だが、それ以前には「神功皇后（170年〜269年ごろ）が戦の帰りに立ち寄り、白鶴が疲れた羽を川に浸し、元気に飛び立つのを見て、傷ついた兵士を入ると傷を癒した」という伝説が残る。嬉野温泉旅館組合によると「はつきりと史料に嬉野温泉が登場するのは戦国時代の末」。美肌の神様を祀る豊玉姫神社の「豊玉姫神社由緒書」に嬉野温泉が湯治場として利用されていたことが記されているという。

江戸時代、施設を整えた佐賀藩の藩営浴場が登場する。現在のシーボルトの湯の前身だ。嬉野川のほとりのうつそうとした木々の中に建っていたとか。藩主は元より藩士や庶民という身分の違いで、浴場へと向かう道も施設の出入り口も違っていたそうだ。

明治に入ると藩営浴場の運営は町の有志たちが行い、名も「古湯温泉」と変わった。



「東構口跡」和多屋別荘付近にあった嬉野宿の東の入り口。長崎奉行もこの東構口から入り、体を休めて長崎へと向かった



市営公衆浴場「シーボルトの湯」はかつての藩営浴場。江戸参府をしたケンペルやシーボルトも利用した



湯遊広場にある「番号境界石」。江戸時代、平地部を蓮池支藩が、山間部を佐賀本藩が分割領有していた嬉野町の境界を示す。表面には漢数字がある



上／柳川杜氏が蔵人と共に酒造りをする「井手酒造」。疲れを癒やすのは酒造場内にある温泉だ
右／嬉野宿、唯一の造り酒屋「井手酒造」の銘柄は「虎之児」。俳人・山頭火も好んだという



たった2本の道に 往時をしのぶ

江戸時代、嬉野宿を通る道は長崎街道と、それに直角に交わる瑞光寺〜藩営浴場間の細い道の2本しかありませんでした。瑞光寺から今も残る細い道を歩いて行くと長崎街道と交わる角には「湯遊広場」があります。湯遊広場には靴下だけ脱げば気軽に誰でも利用できる露天風呂ならぬ無料露天足湯「シーボルトのあし湯」が備わり、旅行者と地元の人たちのふれあいの場所になっています。足湯を楽しんだあとは湯遊広場の前にあるうれしの茶のアンテナショップでのどを潤しましょう。

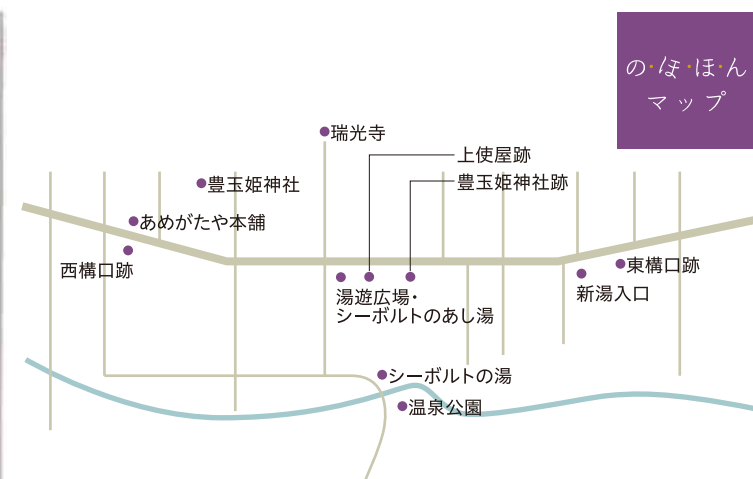
湯遊広場横のなだらかな坂を下りて行くと嬉野川沿いにオレンジ色が際立つ洋風な建物が建っています。ここはかつて藩営浴場があったところで、現在は公衆浴場「シーボルトの湯」として湯を楽しむ人でにぎわっています。市営公衆浴場の前には旅籠大村屋は日本行脚して日本地図を作ったこと有名な伊能忠敬の二行が宿泊所になっていたそうです。

また湯遊広場に戻り長崎街道に入ると、大名や長崎奉行、他藩の高級武士などが休憩した佐賀藩直営の茶屋・上使屋がありました。街道をはさんで向いには藩からの通達を掲示する大切な場所「高札場」があり、その隣には宿場ごとに乗り換える馬や、雇い人の継所「問屋」があったそうです。通りには嬉野唯一の造り酒屋「井手酒造」がおいしい日本酒を続けています。和多屋別荘付近までくるともう東構口です。500mの嬉野宿の散策も終わります。

column.01

歴史を如実に語る関所「俵坂関所跡」

佐賀鍋島藩と黒田藩の長崎警固、諸大名やオランダ商館長の参勤交代で往来が頻繁だった江戸時代、長崎の大村藩との藩境を厳しく警備したのが俵坂関所跡。歴史を如実に物語る場所です。関所には藩士1人と足軽9人が常駐し、大名が通る時には平伏して送り迎えをしたと言われています。通路には門札があり、その両脇には竹の柵が巡らされ、特にキリシタンの取り締りが厳しかったといわれています。



のほほん マップ